津和野本町・祇園丁通り

（島根県津和野町）

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

道路空間整備により、歩行者が約 18％増加

道路特性：商業・生活系街路、歴史系

事業特性：歩行空間整備、道路修景、無電柱化

◆事業の内容

○江戸時代のままの幅員に電柱が立ち並び、車が主役となっていた道路を歩行者のためのみちとして再生

○無電柱化と共に、道路照明柱の修景、舗装の美装化で沿道と調和した街路空間を創出

◆事業の成功要因（実践のポイント）

○地元を巻き込んだ徹底的な話し合い

・先行した殿町通り、駅前通りの事例から、地元を束ねる整備連絡会を組織し、事業実施の可否も含めた地元との協議を重ね、事業実施に対する理解と信頼感が得られた。

○住民意見が咀嚼されたデザインの提案

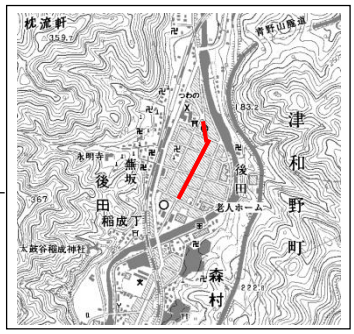
・景観の専門家不在の話し合いの中で、まとまった最終案に対する決定的な安心感がなかったところ、学識経験者のアドバイスから始まったデザイナーの提案内容が、地元の圧倒的な支持を得て、地域の景観を引き立たせるデザインを実現。

◆事業の成果

○歩車共存に配慮した道路の再整備の結果、沿道別地区の歩行者交通量が、整備前に比べ16%減少しているのに対して、本地区は 18%増加

○これまで歩行者は路肩を歩いていたが、整備によって道路中央部を歩くようになり、車両も歩行者に配慮してスピードを抑制

◆事業箇所



◆事業データ

・事業主体：島根県

・路線名称：主要地方道萩津和野線

・道路延長：約 480m

・道路幅員： 車道 4.0m、路肩 1.3m ×2（歩車共存道路）

・事業期間：平成 16 年～平成 18 年

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

◆事業概要

・津和野町は、島根県の西部に位置する、江戸時代津和野藩の城下町の街並みが残る山陰の小京都として、年間約 100 万人の観光客が訪れる町である。特に殿町通りは、鯉の泳ぐ白壁の通りとして全国的にも有名。

・しかし、本町・祇園丁通りでは歩行空間の整備が十分でなく、歩行者・自転車の安全、快適な通行に難があった。さらに電柱が立ち並び、景観的にも問題を抱えていたため、歴史と伝統に調和した歩行者・自転車優先で快適な通りを目指して整備を行うこととした。

整備区間

◆整備概要

〇社会実験による検証
〇歩車共存道路化
〇電線類の地中化
〇歩道の美装化
〇道路附属物（照明等）の修景

社会実験検証時

舗装パターン

道路照明柱

無電柱化整備

夜間照明状況

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

実践上のポイント（構想・計画段階）

～地元を巻き込んだ徹底的な話し合い～

・本町・祇園丁通りの整備は、町内の他道路（殿町通り、駅前通り）を含めたコミュニティ・ゾーン形成事業の一部であった。

・整備にあたっては、古い家並みが両側に並ぶことから、道路は拡幅せず、車道と歩道の幅員構成の変更、新たな交通規制の導入、舗装材料の変更、電線の地中化を主な対策とした。

【事業供用までの主な検討経緯】

- H9.　コミュニティ・ゾーンの指定
- H12.02　基本整備内容の決定
- H14.02　整備連絡会の発足（9 回開催）
- H15.　くらしのみちゾーンの指定
- H15.11　社会実験の実施
- H16.07　工事着手
- H16.09　再検討案の決定
  津和野まちづくり委員長から検討の申し入れとデザイナーの参加
- H16.11　再々検討案の決定
- H18.10　本町・祇園丁通り供用

・これらの実施は、沿道住民等に様々な影響が及び、利益を得る人もいれば、不利益を被る人もいる。そこで、住民との協働により、計画の検討や施工をおこなっていく必要があると考え、先行した他区間での課題も踏まえ、地元との綿密な調整を図るため各町内会を束ねる組織「整備連絡会」を発足させた。

・整備連絡会における地元との話し合いでは、事業実施の可否を含めた議論を行った。事業の実施についての理解は得られたものの、具体的な検討内容については、自然石仕上げの是非や工事期間の客数の落ち込みの懸念などから、検討案は何度となく変更を重ねながら議論された。

主な取組の概要

名称	実施回数	実施期間	備考
コミュニティーゾーン形成事業検討協議会	8回開催	平成9年11月～平成12年11月	整備内容を決定する場
地区集会	12回開催	平成10年7月～平成12年3月	各通りの住民へ整備内容を説明する場(自由参加)
整備連絡会	9回開催	平成14年2月～平成17年3月	本町・祇園丁通りの代表者との話し合いの場
ワークショップ	5回開催	平成11年1月～平成12年2月	誰でも参加可能のべ100人が参加
アンケート	2回実施	平成10年7月 平成11年6月	コミュニティーゾーン内の全世帯を対象
協議会たより	6回発行	平成11年1月～平成12年12月	津和野町内の全戸に配布
事後調査	2回実施	平成14年11月 平成18年11月	アンケート、交通量調査等

平成 12 年 2 月：基本整備案
殿町通りを意識した錆色の自然石舗装

平成 16 年 6 月：検討案
車道部は自然石でなくカラー舗装

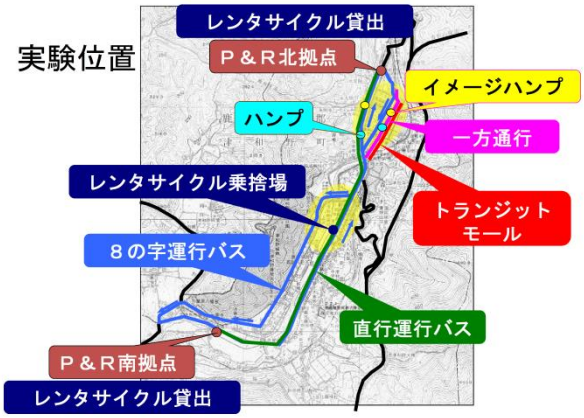
平成 16 年 9 月：再検討案
家並みへの調和に配慮し色味を抑えた

道路デザイン指針（案）との関係：（実践編）７－１－２　検討体制の整備

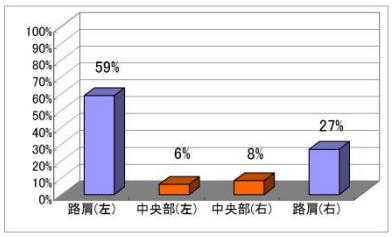
【社会実験の実施】

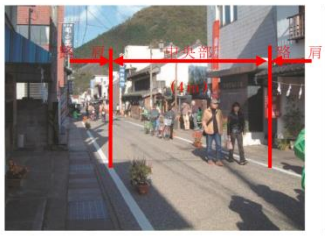
・事業の実効性と地元商店会や住民との充分な合意を得るために社会実験を実施。
・本町・祇園丁通りでは車両の一方通行規制のもと、視覚的に歩道空間を広く見せるようプランターの設置等により、通りをトランジットモール化。
・この社会実験の結果、トランジットモール化によって本町・祇園丁地区の歩行者は路肩部分よりも道路の中央部分へ通行する傾向であることが検証された。

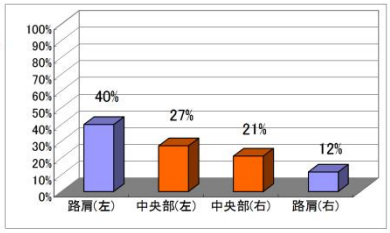
実験期間：平成 15 年 11 月 1 日(土)～平成 15 年 11 月 16 日(日)　計 16 日間
実験内容：【実施メニュー】循環・直行バスの運行、パークアンドライド駐車場の整備、レンタサイクル一方通行規制、トランジットモール、ハンプ設置
【 ソフト施策 】地元ボランティアによる観光案内、オープンカフェの実施、まちづくりシンポジウムの開催



社会実験の実施状況







社会実験前後の歩行位置（上：実験前、下：実験後）

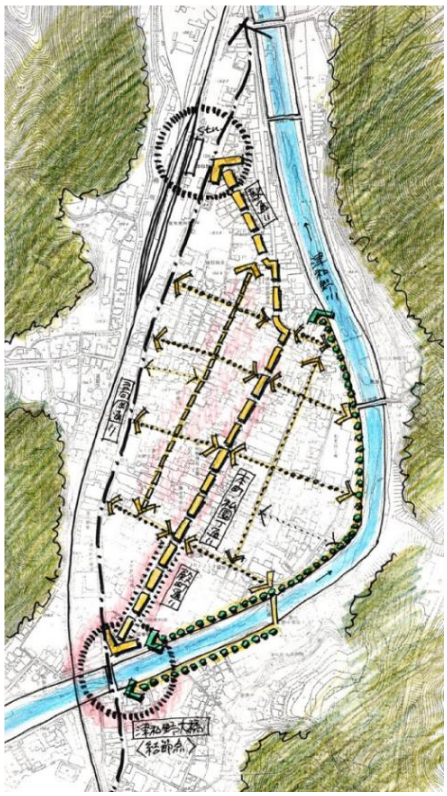
道路デザイン指針（案）との関係：（実践編）７－１－２　検討体制の整備

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

実践上のポイント（設計段階）

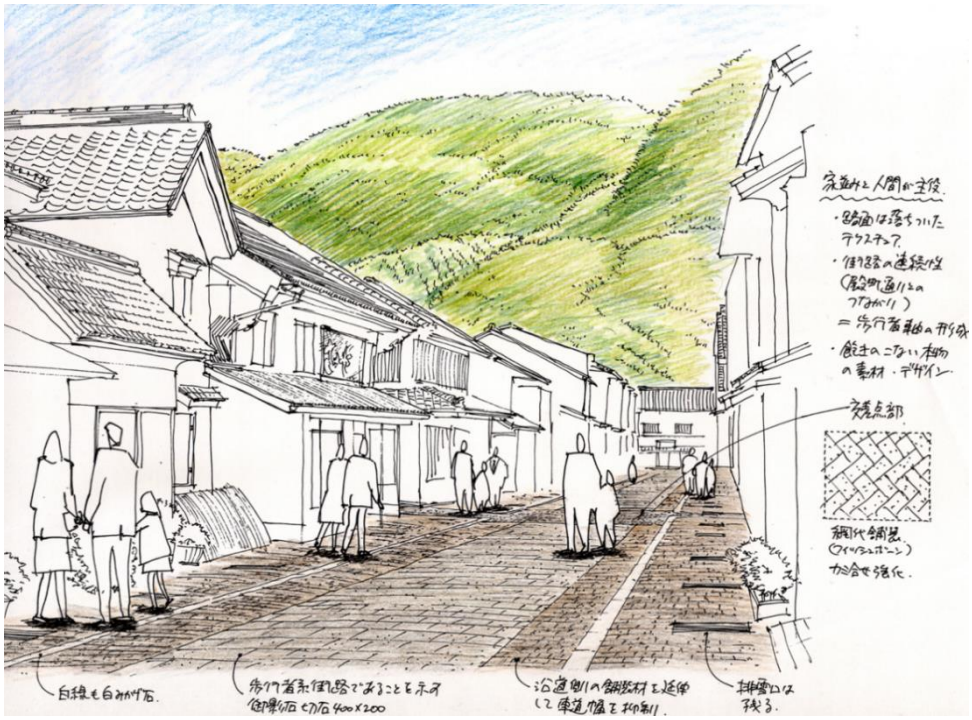
～住民意見が咀嚼されたデザインの提案～

・整備案は、整備連絡会で地元住民との話し合いの下得られた結果であったが、<u>専門家不在の検討結果に対する迷いがあった</u>。
・このような状況下、津和野町まちづくり委員会から、再検討の申し入れがあり、デザイナーが参画する事となった。
・<u>デザイナーが提示した実施案は、これまで地元が検討を重ねてきた内容が咀嚼され、要求を十分満足させるもの</u>であり、地元の反発も少なく、大きな支持を得た。



＜デザインコンセプト＞
“あるくまち･津和野”

●個々に魅力的な街並み、地域性豊かな商業施設などは、本来ゆっくり歩き、探索する土地としての資質を有していると思われる。
●「駅前通り＝本町･祇園丁通り＝殿町通り」が歩行者系ネットワークの主軸となることが重要
●津和野川沿いは魅力的な水辺プロムナード。これが「主軸」と連動し、中心市街地を囲い込みつつ、直行する街路は「水辺に向かうみち」として演出
●高岡通りが車輌の幹線道路と位置づけられる。高岡通りと津和野川沿いプロムナードによって包まれた地域を、回遊性豊かな歩行者系空間のゾーンとすることが重要



整備案のコンセプトシート

道路デザイン指針（案）との関係：（実践編）３－６－２　道路の性格に応じたデザイン
７－１－２　検討体制の整備
７－２（１）技術力の活用

実践上のポイント（施工段階）

～施工の円滑化を図る協力体制～

【地元の積極的な関与】

・道路幅員が狭小なため、電線地中化に合わせて路上機類を民地内に収める必要があった。この際、地元が尽力し、地上機器類の設置場所の絞り込みや設置用地の提供等が行われた。
・埋設管路及び舗装工事については当初、通行帯確保のため、区間の半断面毎の施工を予定していたが、地元から全断面での一括施工と、夜間 22：00 までの工事を許容するという申し出があり、工期が大幅に短縮。

民地内に設置された路上機器

【設計意図の一貫性の確保するデザイン監理】

・設計意図の一貫性を確保や、設計図に表現しきれない納まり等の確認の為、デザイナーからの継続的なアドバイスを受けながら施工。
・殿町通りの車道舗石が大判のため、割れやすかったこともあり、本町・祇園丁通りの舗石ではサイズ選定に留意した。
・照明柱は、沿道民地の敷地境界に合わせた千鳥配置としている。

照明基部の瓦舗装

クランク部分の舗装納まり

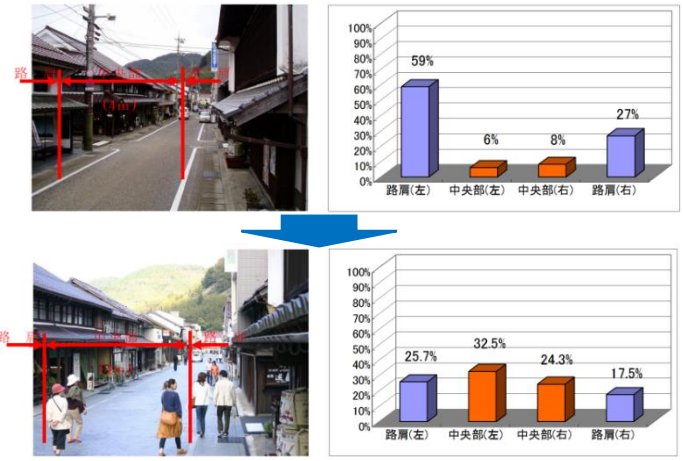
民地境界にバランス良く配置した照明

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

整備効果

～快適性向上の指標として、歩行者が道路中央を通行～

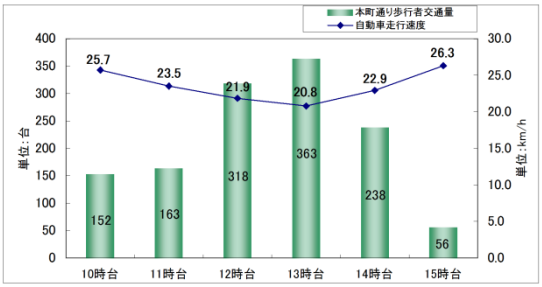
・整備前、大半の歩行者が路肩部周辺を窮屈そうに歩いており、中央部分を通行する歩行者は10%程度であった。
・整備後、中央部分を歩く歩行者の割合が50%を越えるようになった。
・これは、舗装を自然石に変更すること等により、歩行者が歩行者優先の通りとなったと認識したためと考えられる。
・これにより、歩行者の自由な散策が確保され、歩行者の快適性が向上したものと考えられる。



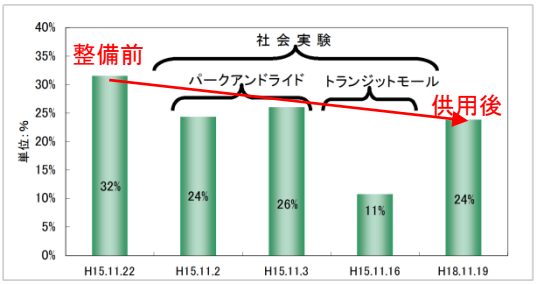
整備前後の路面状況（左写真）と平均歩行位置（右グラフ）

～自動車交通は減少し、走行速度も低下～

・本町・祇園丁通りでは、整備前後も事故は起こっていないが、歩行者数と自動車走行速度の関係をみると、歩行者数が増えるに従い、自動車走行速度が低下する傾向がみてとれ、自動車が歩行者に配慮して、速度を落としながら走行している実態が伺える。
・自動車交通量は、整備前と比較すると、その割合が32%から24%に減少している。



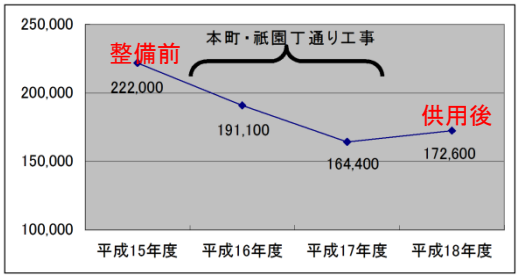
歩行者数と自動車走行速度の関係



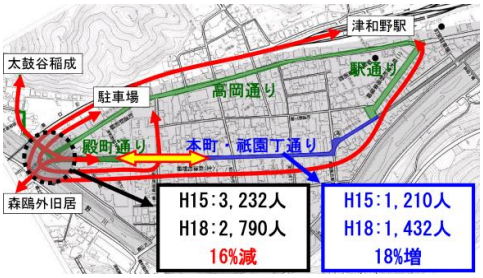
本町・祇園丁の自動車交通量の割合

～観光客の回遊性を創出～

・津和野中心部への観光客入り込み客数の推移は、整備前には年々減少傾向であったが、整備後、増加傾向にある。
・歩行者交通量については、殿町通りと高岡通りが交差する津和野大橋北詰交差点の歩行者交通量が16%減少しているが、一方で本町・祇園丁通りでは18%増加している。
・殿町通りを目的とした観光客が、本町・祇園丁通りも観光の対象とするようになり、まちの回遊性の向上が伺える。



10月～12月の観光客入り込み客数の推移



津和野中心部における歩行者交通量

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

～「道づくり」から「道づかい」へ～

・本事業の供用を機に、地元住民が主体となって、地域のより一層の活性化を目指した完成記念イベントを開催。
・照明点灯式・鏡開き・灯篭による町並みのライトアップ・夜神楽等を実施。

点灯式

夜神楽

灯篭によるライトアップ

鏡開き

・事業供用後、行燈や神楽等の地元主体のイベントが増え、通りを中心に地域のまとまりが生じ始め、「道づくり」から「道づかい」の段階に入ったと地元では認識している。
・沿道にバーやカフェ等、これまでなかった新しい業態の出店が増え、昔からの世代に加えて、新しい若い世代が積極的にまちづくりに参加している傾向が見受けられ、後継者が不在となった空き店舗等の活用が進んでいる。

鷺舞神事

津和野スクリーンプロジェクト

灯篭による家並みのライトアップ

津和野スクリーンプロジェクト：琴演奏

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

具体の整備内容

【デザインコンセプト】

“あるくまち･津和野”

●個々に魅力的な街並み、地域性豊かな商業施設などは、本来ゆっくり歩き、探索する土地としての資質を有していると思われる。
●「駅前通り＝本町･祇園丁通り＝殿町通り」が歩行者系ネットワークの主軸となることが重要
●津和野川沿いは魅力的な水辺プロムナード。これが「主軸」と連動し、中心市街地を囲い込みつつ、直行する街路は「水辺に向かうみち」として演出
●高岡通りが車輌の幹線道路と位置づけられる。高岡通りと津和野川沿いプロムナードによって包まれた地域を、回遊性豊かな歩行者系空間のゾーンとすることが重要

■地域に応じた歩車共存道路

・本町・祇園丁通りは、江戸時代からの幅員のまま現在に至っており、沿道には古い家屋が立ち並んでおり、道路拡幅は現実的ではなく、<u>現幅員の中で歩行者と自動車を共存させる</u>こととした。
・一面の自然石舗装において、歩道部分のパターンが白線を超えて車道に滲み出てくるような工夫によって、<u>歩行者がゆったりと歩きやすく、自動車がスピードを出しにくくする道路空間</u>を実現。
・限られた道路幅員を如何に活用できるかという視点で電線類の地中化を実施し、これに合わせて新たに道路照明柱が設置された。
・照明柱は<u>極力民地側に寄せる等、通行の支障にならない配置とし、歩行者の行動の自由度の高い道路空間</u>を実現。
・舗装を含めた色彩は、<u>沿道の建物を引き立てるべく落ち着いたグレー系に統一</u>。

コンセプトシートと最終案パース

整備の前後比較

【道路舗装】

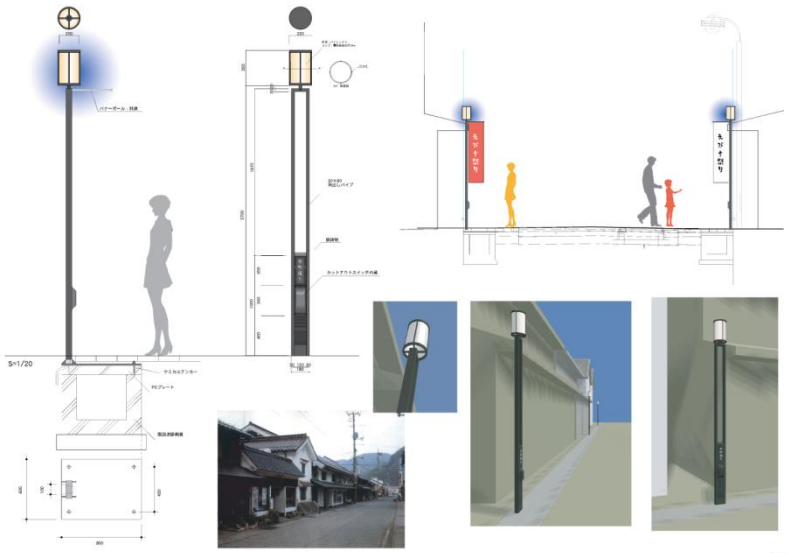
・歩道の舗装材は、殿町通りとの連続性を意識し、質感の豊かな自然石を選定。
・武家屋敷である殿町通りと、町人のまちである本町・祇園丁通りの街路の格の違いに配慮し、デザインを切り替えている。
・乾式工法により観光バスなどによる破損などにも対応した。

歩道詳細（詳細）

歩道舗装（全景）

【道路照明】

・照明柱は、歴史のある街並みに風格、品格を持たせるため、長期間にわたり、風合いを保つことのできる鋳鉄を採用。
・提灯のような印象の灯具を千鳥配置とし、歩行空間を阻害しないデザインや配置の工夫がなされている。



デザイン検討図

照明柱

夜間点灯状況

設置位置

支柱詳細

津和野本町・祇園丁通り（島根県津和野町）

事業を通じた課題と新たな取り組み

【課題】

・このような事業では、必要に応じて有能な専門家を探し出せるネットワークと委託できる仕組みづくりが整備されると有効と考えられる。
・地元コンサルタントがデザイナーとしての能力を向上させていく事が理想であるが、現実的にはハードルが高い。

【新たな取り組み】

・道路整備後にバーやカフェ等、これまでなかった新しい業態の出店が増えている。昔からの世代に加えて、新しい若い世代がまちづくりに参加している傾向が見受けられ、後継者が不在となった空き店舗の活用が進んでいる。
・以前は町内会ごとの縦割り組織となっていたが、道路が整備された事により、地域の横のつながりが形成された。

事業関係者のコメント

【行政担当者】

＜計画・設計段階＞

・本事業は、電線類地中化と下水道整備の同時施工であり、この機を逃すとまちのリニューアルのタイミングがないと考え、整備連絡会に対し、事業に対するやる気、本気度の問いかけを行っている。

・専門家を呼んだことで地元に安心感が生じたと思う。ワークショップで話し合いを行ってきたものの、良いデザインの内容について判然せず、デザイナーの提案により、地元と専門家の意見が一致した。

・合意形成が円滑に進んだのも、重要なのは地元との信頼関係が出来ていたという事である。その上で、専門家によるセンスの良いデザインをとりまとめるというステップが、この事業では有効に機能した。

・地元との調整は方法論ではなく、最終的には担当者の「人柄」と「熱意」と「執念」であると感じる。

＜管理段階＞

・整備後、通りに人が増えたことが、地元の意識を変えるのに大きく影響し、地元が成功体験を実感することが重要である。

・通りの整備によって、重要伝統的建造物群保存地区指定への動きが活発化したと思う。